

悠久の京を訪ねて Part II Vol.6



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

—谷間に響く琴の調べ— 京丹後市大宮町正垣遺跡

京都府京丹後市



■ 琴の調べは祭りと共に

音楽は、古くより人々の生活の中に根ざしていました。縄文時代では土鈴や土笛・太鼓、弥生時代には木製琴など多くの楽器が全国各地から出土しています。これらは当時、主に祭祀に関連して打ち鳴らされ、奏でられていたと考えられています。木製琴には共鳴槽（現在の西洋の弦楽器にあるような共鳴する箱部分）を持つものと持たない構造のもの（板製琴）があります。

古墳時代の埴輪には板製琴を弾く人物埴輪があり、その演奏は膝の上に琴を置き、弦を指で押さえて音程を調整し、もう片方の指で弦を弾いています。

■ 弥生時代の川跡から楽器の琴が

京都府北部の丹後半島の中央部にある京丹後市正垣遺跡は、弥生時代後期から鎌倉時代にわたる集落遺跡です。1986年に発掘調査が行われ、小規模な谷筋を流れていた幅5m×深さ0.6mの川跡から、多くの木製品や土器と共に、琴が出土しました。調査でみつかった時は、単なる木製の板と思われましたが、板についた泥を落とすと板の端に幾つかの突起があることがわかりました。その形状に類似する木製品を調べ

たところ、板製琴の一部と判明しました。

出土した琴は完形品ではなく、縦に割れた左側約半分です。材質は杉で、全長46.4cm、現存幅5.6cm（推定幅約12cm）、厚さ1.1cm程度の大きさのものです。琴尾（写真下部）には3箇所突起が残っており、細くなる先端部には糸掛けのV字状の切り込みがみられます。突起の数からこの琴の弦の数は5～6弦と想定されます。

糸掛け部分を詳しく観察すると、色調が周囲より黒ずんでいます。実際に琴に弦を張って使用されていたようです。また、やや幅の狭い琴頭から7cm程下がった板面の中央には、小さな長方形の穴（集弦孔：弦を通して張るために開けられた穴）が開いています（写真上部）。

弥生時代の正垣遺跡のムラの人々も、琴を弾き、その調べに聞き入っていたのでしょうか。



正垣遺跡から出土した木製琴